

2006年10月29日 聖霊降臨節第22主日礼拝

『わたしたちの望み』

(詩編 46 編 2~4 節、使徒言行録 26 章 1~18 節)

今日、わたしたちは、宗教改革記念日として礼拝を守っています。1517年10月31日宗教改革者のルターは、「95箇条の提題」と呼ばれる質問状を当時のカトリック教会に送りました。これが、宗教改革の出発点です。宗教改革者ルターは、こう言いました。人は、神の恵みによってのみ、キリストを通して、罪を赦され救われると。このことで、ルターはカトリック教会から迫害を受けました。さて、今日読まれた聖書には、使徒パウロが裁判を受けたことが書いてあります。パウロは、キリストが死者の中から復活されたことを人々に証しをした。このことで、ユダヤ人からパウロは訴えられたのです。

アグリッパ王とベルニケが、総督フェストゥスのところに訪問してきました。囚人パウロのことをアグリッパに話しました。その概要は、こうです。祭司長やユダヤ人たちが、パウロを訴えている。パウロは、死んでしまったナザレのイエスが生きて主張しています。そのことで、パウロはユダヤ人から憎まれて訴えられているのです。裁判は、どうにも収拾が付きません。パウロは、自分がローマ市民なのだからローマ皇帝の裁判を受けたいと上訴をしてきました。パウロが、皇帝に上訴したので皇帝のもとに護送されることになりました。囚人を、皇帝のところへ送るからには罪状書きを書かなくてはならない。しかし、なんと書けばよいのか総督には見当も付かないというのです。これを聞いてアグリッパは、非常に興味を示しました。「わたしも、その男の言うことを聞いてみたいと思います」。そして翌日、アグリッパ王は、パウロに会うことになりました。総督の命令で、囚人パウロがやって来ました。

アグリッパ王は、パウロにこう言いました。「お前は自分の事を話してよい」と。そこで、パウロは、手を差し伸べて話を始めました。「アグリッパ王よ、私がユダヤ人達に訴えられていること全てについて、今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いであると思います。王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。」パウロは、アグリッパ王に丁寧に挨拶をして話し始めました。

パウロは、まずイエスに出会う前の自分の生き様について話しはじめました。パウロの若い頃から、ユダヤ教の中でも最も厳格なファリサイ派の一員として過してきました。ファリサイ派の一員として誰より熱心に戒律を守って来たのです。このことは、パウロの同胞のユダヤ人なら誰でも知っていました。パウロが、ファリサイ派の者として誰より熱心であることと証言しようと思えば出来るのです。誰もそんなことは言いませんが。パウロが、ファリサイ派の一員として熱心にやって来たのは訳があります。「神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。私たちの十二部族は、昼も夜も神に仕え、約束の実現されることを待ち望んでいます」。神の約束の実現を誰より望んでいればこそ、パウロは熱心であったのです。今も、パウロは神の約束を望んでいることに、

何の変わりもありません。「王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです」。この約束とは、神がアブラハム、イサク、ヤコブに与えたもので、その後のユダヤ人達にとっても生きる力となってきました。イスラエルの先祖達は、熱心に夜昼神に仕えて、約束の実現に到達したいと望んでいたのです。この約束は、ユダヤの人々が思いもしない形で実現した。そうパウロは言うのです。神が、与えた約束とは死者の復活なのであるとパウロは断言しました。

「神が死者を復活させてくださるということをあなたがたはなぜ信じがたいとお考えになるのでしょうか」。死者の復活は、預言者たちによって既に語られてきました。(ダニエル 12 章 2 - 3、イザヤ 26 章 19、ホセア 6 章 2、エゼキエル 37 章 1 - 14)。ユダヤ人の中には、死者の復活を信じる人達を信じない人達がありました。信じない人の代表はサドカイ派です。この人達は、も死者の復活などないと言いきっていました。一方、ファリサイ派の人達は死人の復活を信じている人たちです。しかし、パウロはファリサイ派もサドカイ派も含めた全てのユダヤ人に向かって言いました。神が、死人を復活させるということがなぜ信じられないのですか、と。というのは、ファリサイ派の人達も、死者の復活は、世の終りの時まで決してあり得ない。遠い彼岸の彼方のことだと思っていました。神様が、お望みなら今すぐにも死者を墓から引き上げることが出来るなどとは信じていなかったのです。しかし、実際神は、死んで人を復活させる奇跡を起してきました。現実、十字架で死なれたイエス・キリストを神は復活させたのです。神が復活させたイエスは今も生きておられて神の右におられるのです。

パウロは、自分の回心について振り返って語り始めました。今でこそ、パウロは、神が主イエスを復活させたことを信じています。しかし、かつてのパウロは、実に誰よりもナザレのイエスに反対していました。パウロは、仲間の先頭に立って、クリスチャンを迫害してきました。クリスチャン達を、執拗に追かけ、捕まえ、牢にいました。クリスチャン達が、裁判で有罪にされる時も、死刑にされる時、いつも賛成の意志を示していました。ステファノが、殺された時も。パウロはステファノの死刑に賛成していました。至るところの会堂に出かけて行って、クリスチャン達を罰し、イエスを冒瀆するように強制していたのです。当時の自分を振り返ってパウロはこう言っています。「彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまで迫害の手を伸ばしたのです」。キリストに対しても、クリスチャンに対してもパウロは、別に恨むような理由はありません。それなのに、パウロの心には、キリストに対して、クリスチャンに対して憎しみが激しく燃えていたというのです。理由も何のに誰かを憎むというのは、おかしいことです。主イエスが、あらわれてくださらなければ、パウロは気付かないでいたでしょう。ここで、パウロに一つの転機が訪れました。パウロの回心の出来事です。パウロは、祭司長達から、クリスチャンを見つけたら逮捕して良いと権限をもらって旅していました。パウロの一行が、ダマスコの町にへ向かう途上でした。時刻は、真昼、正午でした。パウロは、突然見たこともない天からの光を見たのです。それは、太陽の光よりも明るく輝いていました。パウ

口と同行していたもの達もその光に照らされて、皆地面に倒れました。パウロは声を聞きました。声は、ヘブライ語でこう語りかけました。『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。とげの付いた棒をけると、(あなたが)痛い思いをする』。声はこのようにパウロに語ったのです。まさに、怒りに燃えていたパウロの目を覚まさせるような主のことばでした。パウロの心にあったキリストに対する怒りと憎しみは、パウロ自身を傷つけていたのです。パウロの心は、憎しみのため、平安を失っていました。まさに、とげのある棒を蹴っているようなものだったのです。「主よ、あなたはどなたですか？」我に返って、パウロは、問いかけました。すると声はこう答えました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである』。憎み続け迫害し続けてきたイエスさまがパウロに近づいてくださったのです。主イエスは、パウロに言われました。『起きあがれ。自分の足で立て』。主は、倒れたパウロを立ち上がらせました。そして、新しい道を示してくださいました。『わたしがあなたに現れたのはあなたが、わたしをみたこと、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである』。パウロは、主イエスに出逢って悔い改めを促され、召命を受けました。パウロは、回心と召命を一時に経験したのです。このことから、わたしたちも一つ教えられます。わたしたちは、悔い改めというと、何か暗いイメージを持ちます。しかし、本当に神の前で、キリストにあって悔い改めること、そこに新しい道が見えて来るのではないのでしょうか。

キリストは、パウロに、より明確に新しい使命を与えてくださいました。「わたしは、あなたを、この民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして、わたし(キリスト)への信仰によって、罪の赦しを得、聖なるものとされた人々と共に恵みの分け前に与ようになるためである」。パウロの使命は、キリストによって全ての人の目を開き神に立ち帰るように促すことだったのです。わたしたちクリスチャンは、皆パウロと同じ使命を担っています。わたしたち人間は皆、罪の中で生まれてきました。生まれながらに、神に逆らう罪人だったのです。でもわたしたちはそのことを知りませんでした。自分では、光の中にいるつもりでした。でも、実際、わたしたちは皆闇の中に生きていたのです。神様などいなくても、自分の力で立派に生きているいるつもりでいました。それこそが罪です。そうやって、自分たちの造り主である神に背を向けていました。神に背いて、隣人と、いがみ合って生きていまいした。自分さえよければ、自分の身内さえ良ければそれで良いと思っていました。実に、サタンの思うがまま支配されていたのです。キリストを知ることによって、わたしたちは、目をひらかれたのです。キリストによってわたしたちは、罪人だったと気付かされました。罪もない、キリストを十字架にかける程罪深い者であったのです。キリストは、こんなわたしたちの罪を償うために十字架に掛かってくださったのです。キリストを信じることで、わたしたちはサタンの支配から、神のもとに帰ることができました。わたしたちは、神様の恵みによって、キリストを信じる者とされているのです。この恵みを、まだキリスト知らない人とも分かち合いたいと思います。だから、わたしたち教会は、主イ

エス・キリストの福音の説教を重んじているのです。聖なる福音が語られ、これを聞いた人だ心から信じ、受け入れる。そこに罪の赦しがあります。イエス・キリストを与えてくださった神に、わたしたちは揺るぎない希望を持っています。宗教改革の始まりは、罪人を赦してくださった神様の恵みを再発見したということです。わたしたちも、キリストを通して示された神の恵みにしっかりと立って行きましょう。恵みによって、キリストを信じる信仰によってのみ、わたしたちは、約束された恵みに与ることが出来るのです。

[説教者：堀地敦子牧師]